

第十二席 自分で往くな

此機受  
持つ親  
たあつ

一 私わたくしが話をはなする事は、うちへ歸かえつて見て、お前まへさんの胸むねに手てをあてゝ見ると  
分わかる。蓮れんじよ如じよさんの一通つう々くの御化導ごけだうに、南無なむといふは、衆生しゆじやうが阿彌陀如來あみだじよらいに向むかひ、  
衆生しゆじやうとは墮おちる機き、阿彌陀如來あみだじよらいとは墮おとさん親おや、墮おちる機きと墮おとさん親おやと、直ぢかづ  
けに向むかふ。墮おちる機きと墮おとさん親おやと差向さむかひ、ハ、ア、と行ゆけ。さうせると俺おれの方はう  
は、今迄いままではやりそこなひ、聞きこえたら此心このこころに變目かひめがあるだらう、頂いたけたらよくな  
るだらう、そんならよいな、と心こころに合點がてんし得心ごくしんして來こなければ、彌陀みだは助たすけてお  
呉くれんかのやうに思おもつて居ゐつた。あなたの勅命ちくめい承うけはれば、まるで正反對せいはんたい、ウン  
と云いはぬ、結構けつこうといはぬ、大丈夫だいぢやうぶといはぬ、よろしうございますと返事へんじせん、ま  
だ貰もらへぬ、困こまるぢや無い其返事そのへんじせず承知ちやうちせず合點がてんせぬ、それを受持うけもつ親おやであ  
つたかなと彌陀みだに向むかふ。向むかひやうぢやぞ。それをお前まへさん等ら、聞きえたらどうかな

自分で往くな

四二七

眞似し  
ようこ  
なかる

るだらう、頂けたら結構でございますといふだらう、大丈夫でございますと返事するだらうと思ひます。さう思はにやいかぬ。人の喜ぶのを聞いたら大丈夫といふから、眞似しよう／＼とさかゝる。なれんわ／＼、なれんものちやから、まだ貰へぬ、まだいかん、首を捻つて困るだらう。今度は正反對。今迄は聽聞して戴いたら、御慈悲は結構でございます、と落着いて、そんなら宜しうございますと返事得心してから、御助けにあふのちやと思つて、なれんが／＼と、ながい間、自分の心だけで困りました、と行け。あなたの勅命承はりやまるで正反對宜しうございますと返事せぬ、結構でございますと云つて呉れぬ。大丈夫でございますといはぬ、いはぬ此機を受持つ親であつたかと、彌陀に向ふ。安からう。お前さん等信心や疑ひはれるをしつかり持つて行くで困る。墮ちる機御助けはさうでない。墮ちる機を受持つ事、引受ける事、受取る事之が正定聚の御助け。一重ではいかん、眞宗は二重の御助け、正定聚と滅度と二重。參れると承知出來ぬ、大丈夫

根機に  
かなう  
た本願

といへぬ、困つた、困るなら困り損。どうしませう。何ほ聞いても得心せん。結構といはん、いはん方を受持つ、いふ方なら勝手にせよ。うまいぞ／＼と行け。「まことにわれらが根機にかなひたる彌陀如來の本願にてまします」それでこそ根機相應、墮ちる機受取る、墮ちる機引受ける、墮ちる機受持つとはそこをいふ、愈となつて參らせて貰へるといはぬ、墮ち相な、これより何んにもござりませぬ。それでよし／＼。それでも工合が悪い。悪相な顔をして居るわ。よいものを出したいやうな顔をして居るわ。墮ちる機御助けはこゝちや、墮ちる機御助けはこゝを聞くのちや、衆生が阿彌陀如來に向ふとは之を云ふ。譚題に備へた「かゝる機までも助けたまふ佛は阿彌陀如來ばかりなりと知る」ハ、ア、此機受持つのか、と行け、驚いた所ちや。かゝる機までも助け給ふ佛は阿彌陀如來ばかりなりと信じて夜明けして疑ひ晴れて承知して合點して御助けに遇ふのかと思ふたであてが外れた。こんな機を御助け、と行け。疑ひ晴れて信じて夜明けして行

あてが  
外れた

自分で往くな

くなら勝手にせよ、なれん方を引受ける。變な佛があるもの、それでよからう、それでもいかんか。お前さん等苦しんで居る人は、之をやつて見い、一遍に溜飲が下がる、炭酸を十匁飲んだやうにすうつとする。うちへ歸つたら、今日はいよい事を聞いた、此機受持つ、うまい事聞いた、ちやが魂、又初めるわ。又御始めちや、此機受持つのちや、どうもならんのを御助けか、有難い〜と喜ぶわ。うちへ歸ると魂、今出かけてもよいか。又やる、それは何遍やつても同じ事ちや。どうもならん此機受持つ親であつたか、確かになれんから、こゝ受持つ、うまい事聞いた。うちへ歸つて「魂、今夜でも」と始めてはあかんぞ。それで蓮如さんは雑行すて、釘を打てと仰しやる。此機受持つ親であつたか、と云つたら釘を打て、あとふりかへつて我機の方を眺めるな。此機の方は、ウンと云はふが云ふまいが、結構と思はふが思ふまいが、大丈夫と云はふが云ふまいが、受持つ親がましますなら、此機には用事はないのちやな、と釘を打つ。はからひのやんだ、

自力のすたつた、我機の方に目の着かん所。  
往く  
自分

二 此機受持つ親がましますのなら——機にもごり——たゞ今からは、此機の方がウンと云はふがいふまいが、結構と云はふが云ふまいが、大丈夫と思はふが思ふまいが、自分で往くのちや無い。受持つ親がましますのなら、此機には更に關係は要らなんだのちやな、とすてるのちや。うまい工合に釘が打つてある。もう「魂」はやめえよ。みんなやり相な顔ちやが、困つた事ちや。うまい事聞いた、此機はどうもならんのだ〜、此機をどうかしてと思ふのは間違ひ、なれん方を引受ける、有難い〜。うちへ歸つて一服煙草をのんで、「しかし魂」又始める引受ける阿彌陀様をのけて獨りすつと御往きなさる。「まだ貰へぬ」こんな事なら千年萬年経つても同じ事ちや。一寸阿彌陀さんあつち向いて、大事な我が後生ぢや、一遍やつて見る、「今夜でも」又始める。こゝはよく云うて置かんと何遍でもやり相な顔をしとる。

自分で往くな

雑行すて、自力をすて、我機の方に目を着けん、此機受持つ方がましますのなら、機に釘を打つて、只今からは、此機が參れ相にあらうがなからうが、わり相にあらうがなからうが、ウンといはふがいふまいが、引受ける親がある、此機には更に用事は無いのである。

三 今から四年ばかり前話した事がある、新潟へ行つた、所が新潟に大方五日ばかり居つた、二遍目に行つた時には座敷にお婆さんが来て、七十近いお婆さん、聞いたら忘れくしますで、ごうぞ書いてやつてお呉んなさい、書いたらあかぬ、お前さん俺が言ふ事を覚えて歸れ、此機受持つ親であつた、此機受持つ親ならば、只今からは此機の方は、ウンと言はうが言ふまいが、結構と云はふが云ふまいが此機には用事はない。これだけ覚えて内へ歸つてやりなさい。お婆さん内へ歸つた、歸つた所が、「お婆さんえらうおそかつたな」、「此機受持つ親ならば」、「お婆さんごうした」、「此機受持つ親ならば」と繰返す、一生懸命ぢやで、ごう

新渴の  
老婆の  
受持の  
此機

確に  
の世  
話いら  
す

いふ事があつた、それから三度目に行つて其話をした、お婆さん解つた、常住云つて居つたら腹に這入る。其位熱心にすれば腹に這入る。此機受持つ親であつたか、此機引受ける親であつたか、家へ歸つて大きな聲をすると笑はれるぞ、此機受持つ親があつた、受持手の親があつたら、確かになるの世話要らず、丈夫になるの世話も要らず、此機には何んにも今から用事は無い、なれるなれんの世話は要らなんだと行くのだ、解つたか。その所を確かりせんならん。これさへ分れば苦しみは除れるぢやらう、こゝだけが苦しい。是が久遠劫より今日迄吾々を三悪道につけまはした恐しい奴、之が私の命の仇ぢやぞ、これと縁を絶らにやいかん。

機  
の深  
信の  
話

四 今日機は深心の話をしよう、我機は悪き徒もの、地獄ならでは行き方の無い奴、此事を話したい、機の深心をいはんと解り兼ねる。これから御示談に會ふ、俺が名代をしてやる。違つたら違つたと云つても構やせん。俺が尋ね手、お

自分で往くな

前さん答へ手、俺が一逼きつたい。どういふ事がきつたい、外ぢやないが、今の御話はよくわかりました、まあ分つたとして置け。そんなら何か、今出かけて行かんならん、どんな氣持ちぢや言つて見い。ソレはなあ、ソコがなあ。そこがどうした、今行かんならんとなるとどういふものか。あなあ、あなあ、あなあ、どうしたあのおう、もとの通り、どういふ事ぢや、何んにも無いがな。分つたか、今の話の念押しぢや。今の話がわかつたか。私が一逼尋ねる。今夜でも行かんならん、どんな氣持ちぢや云つて呉れ。どんな氣持といふと。確かになつたか、丈夫になつたか、しつかりなつたか、それをきく。それはなア、それがどうした、あんなア、あんなアどうした。あのおう、あのおうぢや、あのおうそこはなア、どうした。そこはもとのどほり。もとの通りとはどういふ事ぢや。摺まへ所は何んにも無い。よう聞き分けて呉れ。これならもとの空阿彌雜行棄て、自力を捨てるといふ、ここをよう腹に入れて呉れ、何ん遍やつても後戻りするのはいふのである。我機には

雑行捨  
階たの  
ますの

用事が無かつた。こんな機受持つ親であつた、確かになる世話要らぬ、丈夫になるの世話要らぬ、しつかりなるの世話要らぬ。何で、受持つ親がある。然らばたつた今でも出かけて行くのにどんなものぢや。あのおう、あのおう。どうぢや、そこはなあ、そこはどうぢや、あのおうそこは、そこはどうぢや、もとの通り、もとの通りとはどういふ事ぢや、何んにも摺まへ所が無い。同じ事ぢや。どうぢやらうが。これが爲めに苦しむのぢや。これは雜行棄てず彌陀たのますの方、今度は上等の方。今はからひのすたつた、自力のすたつた、我機の方に目の附かぬ、渡した方ぢや。今出かけて行かんならんと思ふとどうぢやな。私はたつた今でも出掛ける行かんならんと思ふまでも要らぬ。我機には今から用事は無い。何故、受持つ親があるで用事が無い。墮ちんの世話は彌陀が受持つ。參るの世話も俺が受持つ。墮ちん參るは俺が命懸けで受持つといふ仰せが聞こえる、獨りで行くと思ふから足るの足らんの世話が要つたが、今日は一人で行くので無い、引受ける親があつ

自分で往くな

たのぢやな大變違ふ、はからひのやんだ自分のすたつた、我機の方に目の附かぬ、明かになるならんの世話要らず、確かになるならんの世話要らず、足る足らんの世話要らず、何故か、自分で行くのぢや無いで、命懸けでも引受ける親と一緒に行くといふ親切に腹が滿れる。そこの違ひ目をやう一つ腹に入れんといかぬ、これさへとれて見い、心配はない、こんな親様があつたればこそ、こんな奴でもやうこそ〜と日暮しが出来るやうになる。

命懸け  
でも引  
受ける